

2019 7

JAPAN APIC

No.009

Since 1975





APICは毎年、「太平洋・カリブ記者招待計画」を実施しています。太平洋の島嶼国、中米の島嶼国であるカリブ諸国で活躍しているジャーナリストを招待する企画です。

日本という国を、そして、そこに生活する日本人の生活感を観察していただき、これを彼らの筆や映像の力で発信し、日本についての理解を深めて貰おうという試みです。観光もして貰いますが、有識者との懇談を通して日本の直面している課題について理解を深め、「環境と防災」を主題として各地を視察し、避難対策、人命の救助策、行政の対応などについて相互の知見を確かめ合う機会として頂きます。

昨年の第4回の企画からジャーナリズムを専攻するインターン学生の参加を得て記事を書く現場の経験を学ぶ機会を提供しています。

また、これらの地域のジャーナリ

ズムの向上を目指すことを視野に入れ、「APIC Journalism Fellowship」の賞状を差し上げ、彼らのキャリア・パスに貢献する試みを組み込みました。第1回からの参加者数は21名になりますが、彼らのすべての記事がアーカイブとして収録されています。

この企画の充実には、フロイド・タケウチ氏とドーン・マトウス女史のお二人の力添えを頂いています。お二人とも日本在住のご経験がありジャーナリズムの経験も深い方です。APICウェブサイトに詳しい報告が掲載されていますので是非目を通して下さい。

今や世界は質的に変化しています。多様性と共通性の交錯する世界の現況は人類の生存にかかわる諸問題に一致して取り組む時代となっています。この企画がその一助になることを期待しています。

2018年12月～2019年5月のAPICの主な動き

- 12月12日 上智大学にて Island Sustainability Symposium 開催
- 12月20日 第353回早朝国際情勢講演会（外務省北米局長 鈴木量博氏）
- 1月7日 太平洋・カリブ学生招待計画2019（～2月1日）
- 1月17日 第354回早朝国際情勢講演会（外務事務次官 秋葉剛男氏）
- 2月1日 上智大学より短期インターン生の受け入れ実施（～2月28日）
- 2月9日 ミクロネシア連邦観光促進ミッション（～2月17日）
- 2月18日 上智大学にて集中講義「世界文化遺産（ナンマトル遺跡）」（上智大学客員教授 片岡修氏）（～2月22日）
- 2月21日 第355回早朝国際情勢講演会（G20サミット担当大使、前駐イスラエル国特命全権大使 富田浩司氏）
- 3月4日 College of Micronesia - FSMにてナンマトル遺跡講座（上智大学客員教授 片岡修氏）（～3月9日）
- 3月14日 サモアにて太平洋環境セミナー開催（～3月15日）
- 3月20日 第356回早朝国際情勢講演会（外務省南部アジア部長 滝崎成樹氏）
- 4月7日 ミクロネシア3か国（パラオ・FSM・マーシャル諸島）若手リーダー招待計画（～4月15日）
- 4月18日 第357回早朝国際情勢講演会（アフリカ開発会議（TICAD）担当、国連安保理改革担当、人権担当兼国際平和貢献担当特命全権大使 岡村善文氏）
- 4月26日 ミクロネシア歴史保存官コーラー氏の招聘及び日本・カンボジア両国の世界遺産関連施設の視察（～5月5日）
- 5月16日 第358回早朝国際情勢講演会（外務省経済局審議官 飯田圭哉氏）

APIC No.9 CONTENTS

01 ごあいさつ

03 特集 APIC 早朝国際情勢講演会

太平洋事業

05 ミクロネシア連邦観光促進ミッション

太平洋諸国リーダー招聘計画

09 ミクロネシア3か国若手リーダー招聘計画

13 上智大学にてナンマトル遺跡集中講義実施／COM-FSMにてナンマトル遺跡講座実施

14 ミクロネシア歴史保存官コーラー氏の招聘及び日本・カンボジア両国の世界遺産関連施設の視察

15 サモアにて太平洋環境セミナー開催

カリブ事業

17 第3回「ハイチ便り」～ハイチの文化的特色（その1）～在ハイチ日本国大使（当時）八田善明氏

太平洋・カリブ事業

19 太平洋・カリブ学生招待計画2019

23 上智大学にて Island Sustainability Symposium 開催

ザビエル留学生奨学金

24 第6期ザビエル留学生決定

若い世代の育成

25 上智大学より短期インターン生の受け入れ実施

APIC 役員に聞く

インタビュー

27 東神インターナショナル株式会社 名誉会長

本多 義人 APIC 評議員

31 APIC インターン OB の声

32 2016年「太平洋諸国若手リーダー招聘計画」参加者 デイビッド・パヌエロ氏がミクロネシア連邦大統領に就任

33 令和元年度事業計画／収支予算

34 APIC 役員名簿／ザビエル高校留学生奨学金制度へのご寄附のお願い／事務所移転のお知らせ

今号の表紙写真



マーシャル諸島

撮影者：フロイド・K・タケウチ

Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

過去の講師一覧（2018年1月～2019年6月）

■第343回早朝国際情勢講演会

日時：2018年1月18日（木）
講師：外務事務次官 杉山 晋輔 氏
演題：「2018年の日本外交 ―課題と展望―」

■第344回早朝国際情勢講演会

日時：2018年2月15日（木）
講師：外務省経済局審議官 飯島 俊郎 氏
演題：「日本の経済外交の現状と展望」

■第345回早朝国際情勢講演会

日時：2018年3月15日（木）
講師：前駐フィリピン共和国特命全権大使 石川 和秀 氏
演題：「最近のフィリピン情勢と日比関係」

■第346回早朝国際情勢講演会

日時：2018年4月19日（木）
講師：前駐サウジアラビア王国特命全権大使 奥田 紀宏 氏
演題：「サウジアラビアの改革と日本」

■第347回早朝国際情勢講演会

日時：2018年5月17日（木）
講師：外務省地球規模課題審議官（大使） 鈴木 秀生 氏
演題：「気候変動とSDGsに関する日本の取組」

■第348回早朝国際情勢講演会

日時：2018年6月21日（木）
講師：外務審議官（経済） 山崎 和之 氏
演題：「本年のサミット並びに日本の課題」

■第349回早朝国際情勢講演会

日時：2018年7月19日（木）
講師：外務省アジア大洋州局長 金杉 憲治 氏
演題：「最近の北東アジア情勢について」

■第350回早朝国際情勢講演会

日時：2018年9月20日（木）
講師：前駐米特命全権大使 佐々江 賢一郎 氏
演題：「米国勤務を終えて」

■第351回早朝国際情勢講演会

日時：2018年10月18日（木）
講師：外務省中東アフリカ局長 岡 浩 氏
演題：「最近の中東情勢」

■第352回早朝国際情勢講演会

日時：2018年11月15日（木）
講師：内閣官房 TPP 等政府対策本部首席交渉官
梅本 和義 氏
演題：「TPP11と日本の対外経済政策」

■第353回早朝国際情勢講演会

日時：2018年12月20日（木）
講師：外務省北米局長 鈴木 量博 氏
演題：「中間選挙結果を踏まえたトランプ政権」

■第354回早朝国際情勢講演会

日時：2019年1月17日（木）
講師：外務事務次官 秋葉 剛男 氏
演題：「2019年の日本外交 ―課題と展望―」

■第355回早朝国際情勢講演会

日時：2019年2月21日（木）
講師：G20 サミット担当大使、
前駐イスラエル国特命全権大使 富田 浩司 氏
演題：「イスラエルの内外情勢 ―イスラエルから見た
中東情勢―」

■第356回早朝国際情勢講演会

日時：2019年3月20日（水）
講師：外務省南部アジア部長 滝崎 成樹 氏
演題：「最近の南部アジア情勢 その現状と課題」

■第357回早朝国際情勢講演会

日時：2019年4月18日（木）
講師：アフリカ開発会議（TICAD）担当、国連安保理改革
担当、人権担当兼国際平和貢献担当特命全権大使
岡村 善文 氏
演題：「日本のアフリカ外交、課題と展望」

■第358回早朝国際情勢講演会

日時：2019年5月16日（木）
講師：外務省経済局審議官 飯田 圭哉 氏
演題：「我が国の経済外交」

■第359回早朝国際情勢講演会

日時：2019年6月20日（木）
講師：外務省研修所所長（前上海総領事） 片山 和之 氏
演題：「上海から見た日中関係」

※講演時の御役職を記載しています。

講師 外務事務次官

秋葉 剛男 氏

略歴

1982年 東京大学法学部第二類卒業
1982年 外務省入省
1999年 大臣官房総務課企画官
兼大臣官房（事務次官室）
2001年 総合外交政策局国連政策課長
2002年 条約局条約課長
2004年 国際法局国際法課長
2006年 アジア大洋州局中国課長
2008年 アジア大洋州局中国・モンゴル
課長
同年 在アメリカ合衆国日本国大使館
公使
2012年 大臣官房参事官兼北米局、
アジア大洋州局
同年 大臣官房審議官兼北米局、
アジア大洋州局
2014年 国際法局長
2015年 総合外交政策局長
2016年 外務審議官（政務）
2018年 外務事務次官

毎月1回（8月以外）開催される
APIC早朝国際情勢講演会では、
外務省幹部、在外大使などを講師と
してお迎えし、時局の外交課題や激
動する国際情勢などについて講演が
行われます。現職の外務事務次官や
外務省局長、一時帰国中や退官直後
の大使から、いま実際に進行中の国
際情勢のテーマについて質の高い話
を聞くことができる機会として、参
加者からの評価は極めて高いものが
あります。本講演は、APIC維持
会員の皆様には自動的にご案内する
ほか、非会員で参加をご希望の方に
もご案内を行っております。詳細に
つきましては、本誌裏表紙に記載し
ているAPIC事務局の連絡先にご
照会ください。

2019年1月17日、ホテルオー
クラ東京において、第354回AP
IC早朝国際情勢講演会が開催され
ました。講師には秋葉剛男外務事務
次官をお迎えし、「2019年の日本
外交―課題と展望―」という演題の
下、講演が行われました。
秋葉次官からは、中間選挙をふま
えたトランプ政権の成果と今後の
国際社会の動向、日米中関係や朝鮮
半島情勢等を中心に2019年の日
本外交が直面する重要外交課題につ
いてお話がありました。講演の後には
質疑応答の時間が設けられ、活発
な意見交換が行われました。



早朝国際情勢講演会の様子



講演中の秋葉次官



末永氏によるガイド



チューク州の若手リーダー達との懇談会

11日には新しくなったチューク州庁舎でジョンソン・エリモ知事を表敬訪問しました。真新しい州庁舎は中国の支援で建設されたもので、知事は「APIC訪問団がここを訪れた初めての客だ」と述べました。会談の中で知事はAPICの取り組みを評価、歓迎し、州としても、引き続き協力したいとの発言がありました。

引き続き、庁舎内の会議室でチューク観光局マイロン・ハングチ理事に面会しました。同理事からは「チュークにとって観光は大きな産業、また土地問題については観光局としても理解している、APICとは引き続き手を携えていきたい」という趣旨のコメント

がありました。

昼食はチューク商工会議所の若手メンバーと共にし、社会課題について率直な意見交換を行いました。

その後、キキ・ステイネット氏(チューク州を代表する実業家)が経営するホテルのトラックストップを視察し、チュークウーマンズカウンシル(Chuuk Women's Council (CWC))を訪問しました。CWC本部は、APIC佐藤常務理事が駐ミクロネシア日本国大使に就任していた頃に無償支援として建設されたもので、チュークにおける女性、教育活動の中心地となっています。手工芸品の制作センター、簡易診療所、図書室、学習室等を兼ね備え、チューク

◆**チューク州日本史跡、観光資源視察**

2月10日、上智大学の実践型プログラム「ミクロネシア・エクスポージャーツアー」の今後の発展を目的として、旧日本海軍司令部史跡の残るトノアス島や、近年は観光地として人気を博しているジープ島等の視察を行いました。現地在住でガイド歴20年を超える末永卓幸氏の案内の下、史跡の由来を改めて学ぶことができました。一方、海軍司令部史跡の残るトノアス島では、土地問題からスムーズな見学が難しいという課題も理解することができました。

夜にはケンボー・ミダチューク州

公共事業公社CEOを初め、チューク州の発展を担う若手リーダー達との懇談が行われました。蓑田氏から島根県海士町の地方再生事例として、漁業加工におけるCAS (Cells Alive System 冷凍・細胞組成システム) の紹介があり、参加者は興味を持って聞いていました。ミクロネシア連邦では豊富な海産物がありながら、ブランド化、輸出に漕ぎつけることができておらず、CASの導入によってこれらの問題が解決できるのではないかという話も出ました。同地は、今後実施予定の太平洋島嶼国若手リーダー招聘計画の視察先として検討されています。



エリモ知事（左から4番目）を表敬訪問



チュークウーマンズカウンシルにて



左から：小林氏、小巻氏、APIC 佐藤常務理事、モリ公使、蓑田氏、林氏

2019年2月9日から17日にかけて、APICと駐日ミクロネシア連邦大使館の共同事業としてミクロネシア連邦チューク州、ポンペイ州へ観光促進ミッションを派遣しました。ミッションはAPIC佐藤昭治常務理事を団長として、ロジャー・S・モリ公使（駐日ミクロネシア連邦大使館）、小林健氏（株式会社エイチ・アイ・エス）、蓑田秀策氏（元コールバーグ・クラビス・ロバーツ日本法学会長）、小巻和久氏（安田不動産株式会社（当時））、林ノブオ氏（ツインツリー株式会社代表取締役）、APIC 芳賀達也理事によって構成されました。

APICでは、ミクロネシア地域における重点支援国としてミクロネシア連邦への国際協力を続けています。今回のミッションは、持続的な産業開発、雇用創出によって同国の社会課題を解決し、また将来の観光促進についての示唆を得るために実施されました。

ミッション前半ではチューク州を訪問し、ウェノ島だけでなくトノアス島、ジープ島等の周辺島嶼の実地視察から、州要人への表敬、後半ではポンペイ州での視察、連邦政府要人訪問を織り込み、中長期的な視野に立ち、実際に社会を動かしていくことを念頭に日程を組みました。



滞在中の主なスケジュール

2/9 (土)	チューク到着
2/10 (日)	チューク州周辺視察 チューク州若手リーダーとの夕食会
2/11 (月)	チューク州庁舎にてエリモ知事と面会 チューク観光局ハングチ理事と面会 チュークウーマンズカウンシル (CWC) 訪問 エリモ知事とチューク州観光局主催歓迎夕食会
2/12 (火)	チューク環礁周遊 ザビエル高校訪問 ガーランド連邦議員主催夕食会
2/13 (水)	ポンペイ州へ移動 堀江駐ミクロネシア連邦日本国大使 表敬訪問 COM-FSM 訪問
2/14 (木)	マリオン・ヘンリー資源開発大臣主催朝食会 クリスチャン大統領（当時）表敬訪問 ポンペイ州副知事 表敬訪問 ナンマトル遺跡 訪問 COM-FSM デイジー学長主催夕食会
2/15 (金)	離島アンツ環礁 訪問 ミダ元大統領首席補佐官主催歓迎夕食会
2/16 (土)	ミクロネシア・日本友好協会主催朝食会 モリ元大統領主催昼食会 ポンペイ出発
2/17 (日)	日本着



ナンマトル遺跡



左：ヘンリー・ナンペイ氏の銅像／右：ケプロイの滝

午後、一行はナンマトル遺跡を訪問し、遺跡の状況や課題について現地コーディネーターの藤田氏からブリーフィングを受けました。帰途にはケプロイの滝、キチ地区の社会開発に貢献したヘンリー・ナンペイ氏の銅像に立ち寄りました。ケプロイの滝では、ポンペイ州の事業として、歩行通路、展望台等の観光施設整備が進められており、隣接するナンマトル遺跡と連携した整備に期待がもたれました。

また、夕食会はマングローブベイホテルにおいて、College of Micronesia-FSM (COM-FSM) のジョセフ・デイジー学長主催で開催され、モリ元大統領、カシオ・ミダ元大統領首席補佐官夫妻も参加しました。佐藤常務理事の旧知であるデイビッド・パヌエロ連邦上院議員（現ミクロネシア連邦大統領）がその場に居合わせ、短時間ではありますが、情報交換ができました。15日は、終日をかけてポンペイの離

島であるアンツ環礁を視察し、夜にはミダ元大統領首席補佐官主催の歓迎ホームパーティーがありました。ポンペイの自然、温かい人々と触れ合うことが出来た夜となりました。

ミクロネシア連邦視察最終日は早朝より、ミダ氏をはじめとしたミクロネシア・日本友好協会 (FSM-Japan Friendship Society) メンバーと朝食意見交換会を実施し、会の今後の方向性とAPICとの連携について、引き続き検討をしていくこととなりました。



堀江駐ミクロネシア連邦日本国大使（当時）を表敬訪問

13日、午前中にチュークに別れを告げ、ポンペイ州へ移動しました。到着後、堀江良一駐ミクロネシア連邦日本国大使（当時）を表敬訪問したのち、同大使主催の歓迎夕食会が大使公邸で開催されました。堀江大使から参加者に対してAPICの活動の紹介があり、また同大使館とAPICが共同で取り組んできたナンマトル遺跡保存活動についても説明がありました。ここでもモリ元ミクロネシア連邦大統領をはじめとした来賓から、佐藤常務理事への謝意が述べられました。

14日は早朝よりマリオン・ヘンリー資源開発大臣主催の朝食会、その後はミクロネシア連邦の首都パリキールにてピーター・クリスチャン大統領（当時）及びポンペイ州庁舎にて副知事への表敬訪問を行いました。選挙直前の大変忙しい時期でしたが、APICの日頃の取り組みを紹介することができました。特にクリスチャン大統領は、デジタルセンター建設をはじめとするナンマトル遺跡支援、またAPIC発行のナンマトル遺跡ガイドブックに大きな関心を寄せられ、英語版だけでなくポンペイ語版も作成しなくてはならないと語られました。



クリスチャン大統領（当時）を表敬訪問



パヌエロ連邦上院議員（中央）と共に



COM-FSM デイジー学長（左）と共に

ミクロネシア3か国若手リーダー招聘計画

2019年4月7日から15日まで、ミクロネシア地域の3か国から女性の若手リーダーを招聘し、東京、京都において様々な団体を訪問したり、ミクロネシア地域から日本へ留学する学生と懇談したりする機会を持ちました。今回の招聘者はそれぞれ、ジョーリン・ゴリアクル氏（パラオ）、ミラン・ロヤック氏（マーシャル諸島）、テレシタ・ラーウォン氏（ミクロネシア連邦）の3名です。

◆APICブリーフィング

到着翌日の午前中、3名はAPICを訪問し、スタッフの紹介の後に佐藤昭治常務理事より、APICの事業について説明を受けました。質問など交えながら、各々熱心に話を傾け、島嶼国との関係を国際協力という側面からサポートするAPICに関する知識を深めることができました。

◆JCIE大河原理事長との昼食会

4月8日は、日本国際交流センター（JCIE）大河原昭夫理事長と昼食

◆外務省訪問

8日の午前中は外務省大洋州課の清水席専門官と面会し、ミクロネシア地域における日本の外交や、ジェンダーに関する日本の取り組みの一環として同年3月に東京で開催された国際女性会議（WAW!）についてブリーフをしていただきました。自国社会におけるジェンダーに関することとして、ロヤック氏は「マーシャル諸島では女性は年齢や既婚、未婚に関係なく家族やコミュニティに対する責任を持ち、母親のような役割を担っています」と話していました。また、ゴリアクル氏は自身が最年少の州政府首席補佐官として働く経験から、仕事をする上でコミュニティから支援を得ることが重要だという話をしました。

◆JICA訪問

8日午後にはJICAを訪問し、若杉課長からご挨拶をいただいたのち、奥村主任調査役、丸山副調査役からミクロネシア地域におけるJICAの取り組みや、各プロジェクトの概要について説明を受けました。ODAに関する説明が最初であり、プロジェクトの規模や進捗状況について詳細な説明がありました。若手リーダーたちは自分

滞在中の主なスケジュール

4/7（日）	来日 東京観光（浅草、スカイツリー、千鳥ヶ淵の観光）
4/8（月）	APIC ブリーフィング JCIE 大河原理事長によるブリーフィング 東京観光（浜離宮散策） APIC 主催歓迎夕食会
4/9（火）	外務省 清水上席専門官によるブリーフィング 江戸東京博物館 視察 JICAによるブリーフィング
4/10（水）	防災体験施設（そなエリア東京）訪問 えどがわエコセンター 訪問
4/11（木）	上智大学大学院 まくだなとど教授 訪問 ザビエル、MCT 留学生との懇親会 上智大学キャンパスツアー 太平洋諸島センター 訪問
4/12（金）	東京観光 津田塾大学高橋学長 訪問 ラウンドテーブル 実施
4/13（土）	東京駅発、京都駅着 京都観光（三十三間堂、二条城、祇園）
4/14（日）	京都観光（金閣寺、龍安寺、錦市場）
4/15（月）	関西国際空港から離日

◆APIC歓迎夕食会

7日の夕方には、ミクロネシア各国の大使や公使、招聘計画の中に訪問する団体の方々と一緒に夕食を囲みました。夕食会の最初にはAPIC佐藤嘉恭理事長から歓迎の挨拶があり、フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使より乾杯のお言葉をいただきました。夕食後には若手リーダー3名それぞれからスピーチがあり、本計画に招かれたことに対する感謝や日本滞在中の抱負な

たちも応募できるようなプロジェクトがあることを知り、喜んでいました。また、日本の自国に対する熱心な支援に感謝をし、訪問をしたことでより日本とのつながりを感じることができたと思いを述べました。

◆そなエリア東京

9日午前中は、防災学習体験のためにそなエリア東京に足を運びました。この施設は地震や津波から身を守るための知識や体験学習ができる場所となっています。若手リーダーたちは職員の方から説明を受けながら施設内を見学し、マグニチュード7.3の地震を体験したのち、避難方法を学びました。ゴリアクル氏は「実際に災害に直面した際にとるべき行動を学ぶことができ、非常に勉強になりました。自国でもぜひ人々が災害の際の生存率を上げる方法を学ぶことができるような施設を作りたいです」と述べました。

◆えどがわエコセンター

同日午後には江東区のエどがわエコセンターを訪問し、地球温暖化やそれに伴う気候変動、環境破壊などの問題に対する取り組みに関する話を聞くことができました。江戸川区は海と川に



えどがわエコセンターにて

どを話しました。また、ロヤック氏とラーウォン氏からは伝統的な織物や首飾り、男性用の腰巻きが贈呈され、ゴリアクル氏からは著書の絵本が贈呈されました。非常に貴重なミクロネシア地域の品々を目にすることができ、印象深い夕食会となりました。



京都で着物着付け体験中の若手リーダーたち。左から：ロヤック氏、ゴリアクル氏、ラーウォン氏



夕食会での様子

A woman with curly hair, wearing a dark blue shirt, stands at the front of a meeting room, smiling. She is presenting to a group of people seated around a large conference table. A large screen behind her displays a presentation slide with the title "Linking the past to the present: connecting historical knowledge, the arts, agriculture and traditional practices". The slide also features four small images: a person in a field, a person in a boat, a person in a field, and a person in a field. The room has a whiteboard on the right wall and a printer on a table in the background.

研究所にて、「ミクロネシア若手リーダーを招いて」と題してラウンドテーブル・ディスカッションを開催しました。このディスカッションは、日本において一般的に触れる機会の減多ないミクロネシア地域の情報について、理解を深めてもらう目的で実施されました。ゴリアクル氏は、津田塾大学が女子大学だということもあり、学生へのエンパワーメントを意識しながら、女性としてパラオのコロール州政府首席補佐官の仕事をしている経験と若い女性に対するメッセージを話されました。ラーウオン氏は、ミクロネシア連邦のヤップ・カトリック高校で歴史の授業を担当している経験から、日本とミクロネシアの歴史について、過去から現代までの歴史的な繋がりについて発表をしました。ロヤック氏は、マーシャル諸島の伝統と女性の役割について、カヌーの構造とジェンダー論をからめながら説明をしました。津田塾大学からは高橋学長、英文学科の教授、大学院生が参加し、質疑応答の時間は言語とアイデンティティに関する質問や、日本統治と文化の保持、統治時代に関する現地の人々の感情など様々な質問が投げかけられました。

10日は午前中に上智大学大学院地球環境学研究科のあん・まくどなるど教授を訪問し、日本の海女さんについて話を伺いました。ゴーグルや酸素ボンベなどの技術の発達に伴い、長時間の潜水が可能になるたびに、コミュニケーションの人々とともにその技術を導入するかを検討し、時間や場所などの制限をかけることによって資源を取りすぎない工夫をしてきたという話を聞くことができました。技術の発達を安易に喜び、使用するのではなく、その影響に思いをはせ、人と環境の関係を考える必要があるというメッセージに若手リー

喫緊の課題となっています。環礁でできた国なので、国土が狭く、海面が上昇したら逃げ場がないのです。」と自国の状況を説明していました。センターのスタッフの方は、「環境問題は災害にもつながるので、命に関わる大きな問題でもありますね」とコメントされ、環境問題と災害の繋がりについても言及がありました。その後も海面上昇から土地を守る対策や取り組みについて熱心に質問が続き、環境問題に対する意識の高さを伺うことができました。

ダーたちも新たな気付きを得られたようでした。

同日午後には「ザビエル高校留学生奨学金制度」や「APIC・MCT留学生奨学金制度」で、ミクロネシア連邦とマーシャル諸島共和国から上智大学に留学している学生たちと交流する機会を持つことができました。同国出身のリーダーたちは「自分たちの国の若い人が日本で上手く大学生活を送ることができてうれしく思っています」。

もっと自国から日本への留学生が増え、国に戻った後に経験を活かしながら国へ貢献してくれると良いですね」と笑顔で話していました。その後、学生にキャンパスツアーをしてもらい、食堂や図書館、教室などを案内してもらったほか、上智大学グッズなどのお土産も購入し、大学を後にしました。

同日夕方には明治大学紫紺館にある太平洋諸島センター（P I C）を訪問しました。P I Cでは島嶼国に対する持続可能な経済発展を支援する目的を掲げ、貿易や投資誘致、観光など、様々な角度から交流を促進しようとしている

土曜日と日曜日には京都に足を延ばし、三十三間堂や二条城、金閣寺、錦市場などを散策しました。観光地を回るだけではなく、土曜日にはワックジャパンを訪問し着物着付けや茶道を樂しむことができました。有限会社ワックジャパン代表取締役社長の小川美知氏には、設立の背景やワークライフバランスなどのお話を聞くことがで

ると説明がありました。若手リーダーからはP I Cと自国との実現可能な連携について様々なアイデアが出されました。訪問後、ラーウオン氏は、「日本に太平洋の島国と日本の様々な角度からの交流を活性化させようとしているP I Cのような場所があることを知ることができてよかったです。自分の国の伝統的な物産を日本で見るとは思いませんでした」と嬉しそうに語っていました。

昼食を共にしました。食事をする中で、高橋学長からは津田塾大学の歴史や日本の女性の歴史などについての説明があり、若手リーダーと島嶼国の女性の自立やジェンダーに関する話題について意見交換をしながら、和やかな時間を過ごすことができました。食事の後にはキャンパスツアーを行い、図書館内にある津田梅子資料室を見学したり、守屋多々志の屏風絵、「アメリカ留学―津田梅子」を鑑賞したりしました。

11日午後には、津田塾大学言語文化

き、日本の文化や歴史に触れる機会を
楽しんでいくようにした。

4月の満開の桜の歓迎を受けながら、約一週間の滞在の中で、若手リーダーたちは人との出会いを通してネットワークを作り、日本で有意義な時間を過ごすことができました。日本で得た経験と人とのつながりを大切に、自国の中で活躍していくことを願っています。

(文責：喜多)

[illegible]

APIC No.9 • July 2019 11

2019年4月26日に、文化財行政の第一線で活躍のミクロネシア連邦公文書および文化・歴史保存局文化財担当官のオーガスティン・コーラー (Augustine Kohler) 氏が来日され、片岡が同行しました。5月5日までの行程で、前半は日本、後半はカンボジアの世界遺産の代表的な遺跡と博物館など関連施設を視察しました。招聘は、①遺跡の保存状況と保護活動、②ガイドや文化財専門家の人材養成、③コミュニティと世界遺産の関係、④観光客と世界遺産の関わり、⑤文化財行政の現状、⑥博物館やビクターセンターの活用状況、⑦遺跡における銘板や解説板の表現方法や材質についての視察調査、⑧両国との支援ネットワークを構築し、視察成果を世界遺産ナンマトル遺跡に有効利用できることを目的としました。

日本では関西地区（奈良・京都・大阪）で視察を行いました。奈良のユネスコ・アジア文化センターでは森本晋センター長と中井公研修事業部長から文化財関連の研修プログラム、大阪の国立民族学博物館では小野林太郎先生と野嶋洋子先生から展示について説明を受けました。また、興福寺と東大寺と平城京跡（奈良）、平等院と清水寺と金閣寺（京都）、大阪府立弥生文化博物館を訪問し、遺跡や博物館内

での観光客の動線や設置されている銘板や解説板などを観察しました。

カンボジアのアンコール遺跡群の訪問では、上智大学アジア人材養成研究センター長の石澤良昭先生のご厚意で、アンコール・ワット修復工事長で20年もの間アンコール遺跡群の研究と修築に従事されている三輪悟先生、国際協力と人材養成の豊富な経験をお持ちの丸井雅子先生、環境学が専門のLao Kin Leang 研究員に同行いただき、遺跡だけでなくセンターの役割や修築史や保護活動について詳細な説明を受けることができました。またアンコール地域遺跡保護管理機構 (APSARA) では、アンコール遺跡保存局局長の Ly Yanna 博士から、アンコール遺跡群の保護管理など貴重な話をお伺いすることができました。

両国の各研究機関や博物館や研究者から歓迎を受け、ナンマトル遺跡に適用可能な多岐にわたる有益な情報を入手することができました。今年、外務省の「草の根文化無償資金協力」の助成によるビクターセンターが、ナンマトル遺跡に建設される予定です。この度の視察で得られた情報と経験を大いに反映していただけだと思います。

（文責：上智大学客員教授 片岡修）



左上：平城宮跡の復原された第一次大極殿で
 左下：アンコール・ワットの上智大学西参道修復現場の視察
 右上：京都の平等院鳳凰堂を背に
 右下：タ・プローム遺跡の巨木に浸食された遺構前で

APR
04

ミクロネシア歴史保存官コーラー氏の招聘及び 日本・カンボジア両国の世界遺産関連施設の視察



ユネスコ
世界遺産

ミクロネシア連邦

ナンマトル遺跡

Nan Madol

FEB
02

上智大学にて ナンマトル遺跡 集中講義実施

2019年2月18日（22日）に、上智大学にて「世界文化遺産（ナンマトル遺跡）」という講義名で、上智大学片岡修客員教授による集中講義が開講されました。今年で2年目となります。同大学グローバル教育センターが開講しているもう一つの集中講義「アンコールワット遺跡」と並び、世界遺産に特化した内容で講義が展開されています。19日には元国連ユネスコ事務局長の松浦晃一郎氏による講演を、両クラスの学生たちが共通講義として受講しました。

この講義は、世界文化遺産としてのナンマトル遺跡の重要性はもとより、政治的に強い関係を持つミクロネシアの人と文化と歴史について学び、異文化理解の礎になることを目標としました。上智大学が夏に実施している「ミクロネシア・エクスプロージャーツアー」でのミクロネシアの人たちとの交流や異文化体験に、本講義で学んだ知識が反映されることを願っています。

MAR
03

COM・FSMにて ナンマトル遺跡 講座実施

3月4日から9日にかけて、ミクロネシア連邦の College of Micronesia-FSM (COM・FSM) で世界遺産ナンマトル遺跡講座が開講されました。同大学ハグレルガム教授とエームズ教授担当の「ミクロネシア学」の合同授業で、計45名の学生が参加しました。内容は①ミクロネシアへの人の広がりとは巨石文化、②ナンマトル遺跡と口頭伝承、③世界遺産登録への経緯と今後の課題をテーマに、上智大学の客員教授である片岡博士、ミクロネシア連邦公文書・文化・歴史保存局長のマウリシオ博士、同局歴史保存官のコーラー氏が担当しました。最終日には受講生と一緒にナンマトル遺跡を見学しました。

講座を通して考古学や歴史に興味を持つだけでなく、遺跡の保存と環境保全の重要性を理解していただくことを講座の目標としました。本講座は、将来の文化財専門家育成の入り口となることも期待されています。



SPREP とは (太平洋地域環境計画事務局)

Secretariat of the Pacific Regional Environment Programme の略。
南太平洋地域での協力を促進し、環境を保護し改善し、現在および将来の世代のための持続可能な開発を確実にするために支援を提供することを目的として設立された太平洋地域の主要な国家間の環境機関の一つ。



(サモアのアピアにある SPREP 本部)



フィアメ副首相兼環境大臣（前列中央）と青木大使（前列右）



まくどなど教授によるセミナーの様子

2019年3月14日に、SPREPとの共催でサモアのSPREPオフィスにて環境セミナーが開催されました。日本からはAPIC島内憲評議員と、セミナーの講師として上智大学大学院地球環境学研究所のまくどなど教授が参加し、現地の青木伸也在サモア日本国特命全権大使にもご挨拶をいただき、司会進行はAPIC荒木恵理事・事務局長が行いました。

APICは、2015年7月に上智大学と共催で「太平洋地域における環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナーシリーズとしてパオ（2015年8月）、ジャマイカ（2016年10月）、マーシャル諸島（2017年3月）、バルバドス（2017年9月）、ミクロネシア連邦ポンペイ州（2018年3月）、トリニダード・トバゴ（2018年8月）と各地でセミナーを開催してきました。今回、太平洋地域では4回目の開催となります。

セミナーにおいては、30名以上の環境に関心を有する人の参加がありました。まくどなど教授の講義では、気候変動の影響で日本でもみかん、りんご、米などの作物に被害が出ていることや、日本の漁業、特に海女がいかに環境保全を図りながらバランスをとった漁業を営んでいるかの事例が紹介されました。また、東北の大地震津波で被害を受けた住民が、コミュニティとして一丸となって復興に取り組んでいる

サモア訪問の機会に、青木大使にご案内いただき、政府要人の表敬訪問も行いました。セミナー翌日の15日午前中には、フィアメ・ナオミ・マタアファ副首相兼環境大臣を表敬訪問し、島内評議員から前日のセミナーの報告とAPICの活動について説明しました。まくどなど教授からは、APICと上智大学の連携協定に基づき、環境セミナー等を開催していることや上智大学に「Island Sustainability Unit」が設立されたことなどが紹介されました。副首相は以前、教育大臣に任命されていたこともあり、これらの説明に対し大変関心を示し、同国にとっては「Waste Management」が最重要課題であること、NHKニュース等をよく見ることなど日本には親しみを感じているという話がありました。その後、本年7月にAPICによる招聘を予定しているシリ・エバ・トゥイオティ財務大臣とオスカー・トマス・マリエレガオイ財務次官を表敬訪問しました。大臣は来日した際には財務省幹部やJICA幹部への面会を希望することを述べました。

また、JICAの支援により建設された上水道施設や7月に完成予定の太平洋気候変動センターの建設現場も視察しました。建設現場では日本の企業が日本人ではなく現地の住民を雇用して建設作業を進めており、現地の雇用にも貢献している様子が伺えました。また同国には日本のボランティアが28名もおり、日本が南太平洋のサモアを重視して支援していることが確認できました。

(文責：斉藤)



太平洋気候変動センター建設現場の視察



現地の上水道施設を視察する一行

る事例や、日本語の「魚付き林」、「網代山」、「小魚影林」などの言葉に見られるように、江戸時代以前から日本では森林と漁業のリンクが重要視されていることについても紹介がありました。質疑応答では、漁業関係者から「伝統的な知恵の中に環境とのバランスを取る上で鍵がある」という説明があったが、それをいかに科学者や政策決定者に伝えて活かしていくべきか」という質問が出るなど、およそ30分間、活発に意見交換が行われました。



左から4番目：APIC 島内評議員、5番目：SPREP ロジャー・コーンフォース事務局長

立ち上げ、これを、出自に関係なく公に開かれた芸術センターとするとして、ハイチ中の芸術家・画家が集い、意見を交わし、絵を描く環境を整えました。同センターは、一つの芸術の流れを作り、認知度を上げ（特にアメリカやカナダ方面）、いわゆるナイーヴやプリミティブといった一派として発展していくのに貢献したと言われています。一方で、同センターがアメリカよりの発展をしたことや、一定のスタイルや方針を嫌って、比較的早くの1950年には芸術センターから離反し、造形芸術会館 (le Foyer des Arts Plastiques) を構成するような大きな動きも起きました。また、それ以降も、より自由に自分のスタイルと技術を深めて才能を伸ばす画家も多く生まれ、近代的に発展し (l'école de la Beauté 派のベルナル・セジュールネ、エミルカー・シミリエン等)、より多岐にわたる表現へと発展していきました。

芸術センター中心のナイーヴ、プリミティブ派を見てみると、既にスタイルとして確立したものがあります。素朴な人々の生活や自然等に題材を見いだし、独自の線、色彩や組み合わせを用いた絵画や、イメージネーションによるモチーフの組み合わせや楽園の想像

■世界的に認められたハイチ絵画とハイチ芸術
そうした発展を見せる土壌で、フランスのアンドレ・マルロー（作家、文化大臣）がハイチを訪れた時、サン・

図の様な絵画まで多くの表現が生み出され、技術的にこそどちらかというと素朴で、興行きも限られたタッチですが、それはそれでハイチらしい、として根強いファンがあると思われま

ソレイユ派 (Saint Soleil) の絵画を見て大きく感銘を受けたと言われています。また、著名な画家の絵をラベルにすることで有名なフランス・ボルドー

ここまで、絵画に焦点を当てて概観をして参りましたが、ハイチの芸術には、実に絵画だけでなく、木彫り、石細工等の彫刻や独特なドラム缶アート、ヴァードゥー・フラッグなど多岐にわたる広がりがあります。いずれも、題材、色彩、イメージネーションもユニークなものが多く、欧米の人を魅了し続ける一つのジャンルとして、そしてアーティストとして、国際的にもさらに評価が高まっています。

（※写真は筆者が撮影）
（※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。）

第3回「ハイチ便り」

寄稿：在ハイチ日本国大使（当時） 八田 善明



APIC ウェブサイトでは、八田善明 在ハイチ日本国大使（当時）寄稿の連続コラム「ハイチ便り」を配信しております。日本では知られることの少ないハイチ共和国の政治、社会、文化などについての情報を発信し、日・ハイチ関係の増進を目指します。本ページでは、第3回「ハイチ便り」～ハイチの文化的特色（その1）～の内容を掲載しています。その他の「ハイチ便り」については、こちらのページ（<http://www.apic.or.jp/projects/haiti000.html>）をご覧ください。



イチには絵があります。ハイチにはハイチの人が描いた絵があり、また、独自のスタイル・分野として確立しています。幾つもの派があり、さらに新しい作者・スタイルも生まれ育ち、総称して英語でもハイシアン（ヘイシアン）・アートと呼ばれています。

ハイチでは、生活をしていくのも大変な経済社会状況が前面にでて、一般的に言えばそうした厳しい環境下では、民芸品や土産レベルのアート・彫刻・絵画はともかく、極一部の恵まれた例外でもなければ職業的に絵を描くことも、そうした一定の水準の絵を生み出すこともなかなか簡単ではなさそうです。

ところが、大変興味深いことに、そして驚くべきことに、ハイチには絵が溢れています。都市部では、街中の道路脇の壁一面を埋め尽くすように絵がかけられて販売されており、また、ハイチ絵画等を専門に扱う本格的なギャラリーが幾つもあり、その中には何百ものコレクションを擁するよ



上：絵画ギャラリー／下：街角でも売られるハイチのアート

うなギャラリーも存在しています（ペチヨン・ビル市の代表的なギャラリーのナデル（Nader）さんに今回御協力いただきました）。

スタイルとレベルの確立した著名な画家としては、ハイチ画壇初期の頃から今までの通算で、すなわち技術も独自性もある画家は、これまで300人近くいるといえます。

そのルーツがどこにあるのか、長い欧米等との影響の下で絵を描くこと自体は自然に定着したものと見られます。芸術学校らしきものについても、

独立以降の比較的早い時期からあつたとみられ、時代と共に独自に発展した画家が散発的に存在していました。

■芸術センターの流れ

そのような環境下、（エクトール・IPPORI 等の画家に）一定の完成度と発展性があると見初めたのは、1943年にハイチに渡った米国の水彩画家デウィット・ピーターズ (DeWitt Peter) だと言われています。彼はその後、1944年にポルトープランスに「芸術センター (Centre d'Art)」を



ワインラベルになったハイチのアート

太平洋・カリブ学生招待計画2019



左上・右上：食品サンプルの製作体験の学生たち
左下・右下：座談会の様子



鎌倉にて

本年度も2019年1月7日から2月1日までの一か月間、太平洋島嶼国とカリブ諸国の10か国から合計15名の学生を招待しました。招待学生たちは日本滞在中、上智大学の短期プログラム「January Session in Japanese Studies」に参加しました。

本招待計画は本年度で4回目の実施となりました。招待学生たちは上智大学にて、日本語を学ぶ必修科目1つと、選択科目として「日本の企業と経済」、「日本におけるメディアと時事」、「日本の教育」、「現代の日本文化と社会」の4科目のうち2つを各自選択し受講しました。それぞれの科目にはフィールドトリップやインタビュー調査、プレゼンテーションなどが組み込まれており、日本の経済や文化、メディア、教育に対する理解を積極的に深めることができました。

本年度は、学外での文化交流活動として、東京観光や鎌倉視察、学生同士の座談会などのイベントを企画しました。ほとんどの招待学生にとって、今回が初めての来日であり、行く先々でたくさんの発見や出会いがありました。

います。また、大学院進学だけではなく、日本の学校等で外国語教育や国際交流のために働くJETプログラムなど、本事業をきっかけに、新たな挑戦の場として日本に戻ってくることを目標とする学生の数も増えてきています。

◆東京観光

12日に、APICが企画する週末の交流イベントの一環として、招待学生たちは東京観光に行きました。当日は天気はすぐれず、厳しい冷え込みとなりましたが、予定していた活動や訪問はすべて終えることができました。

初めに、上野公園へと向かいました。招待学生たちは来日後の初めての週末ということもあり、日ごとの勉強からは少し距離を置き、のんびりとした時間を過ごすことができました。参加者たちは「忙しいくない日本」を感じるとともに、動物園や出店を巡り交流を深めました。

その後、東京スカイツリーへと移動し、展望台に上りました。天気心配されていましたが、展望台からの景色は素晴らしい、みな感嘆の声を漏らしていました。そしてこの日最後のアクティビティとなったのが、食品サンプルの製作体験です。参加者たちは「蠟」を使う伝統的な手法でレタスやてんぷらの盛り合わせを

今回参加した学生の出身地域・大学

大学名	学生の出身国・地域
University of the South Pacific	フィジー共和国、ソロモン諸島
College of the Marshall Islands	マーシャル諸島共和国
College of Micronesia - FSM	ミクロネシア連邦
Palau Community College	パラオ共和国
University of the West Indies (Mona Campus)	ジャマイカ
University of the West Indies (Cave Hill Campus)	バルバドス、スリナム
University of the West Indies (St. Augustine Campus)	トリニダード・トバゴ
University of the West Indies (Open Campus)	トリニダード・トバゴ、セントビンセント及びグレナディーン諸島

これらのイベントに際して、留学生をサポートし、より充実したプログラムを作るため、多くの「APIC学生会」のメンバーがボランティアとして参加してくれました。「APIC学生会」には、過去の「上智大学 ミクロネシア・エクスポージャーツアー」参加者やAPICでのインターン経験者など、大学の垣根を超えた学生が集まっています。ボランティア学生が参加してくれたことにより、交流イベントも大いに盛りあがると同時に、招待学生と日本人学生の間には強い絆が生まれました。

また、過去に本招待計画に参加した学生のうち、3名の学生が現在「国費外国人留学生」として日本の大学院で学んで

再現しました。来日以来、レストランで見かける食品サンプルを写真に収める学生が多く、その技術を体験できるといこともあり、みな真剣に取り組んでいます。また、作成した食品サンプルはお土産として持ち帰ることができたため、良い思い出になったかと思えます。工房では小さなサイズの食品サンプルを購入することもでき、母国の家族や友人にお土産として買う学生も多くいました。

◆日本人学生との交流（座談会）

18日には上智大学にて、招待学生と日本人学生による座談会を開催しました。招待学生、日本人ボランティア学生、APICインターン生合わせて20名が5つのグループに分かれ、各グループ一つのテーマ（教育、経済、環境）について議論を行いました。それぞれの国が抱える問題やそれに対する取り組みを共有し今後どのような協力関係を築けるか議論した後、その結果を発表し合いました。

終始和やかな雰囲気の中で議論と発表が行われ、学生同士の良い交流の場となりました。また、発表の際には、他の国の現状を聞き驚く学生や自主的に手を挙げて質問をする学生などもあり、他の国についての発表に興味を持って学んでいる様子が見受けられました。自分の国について

参加した学生の声

プログラムに参加した15名の留学生のうち、2名の感想文を掲載しています。(APIC 和訳)



ソロモン諸島
より

南太平洋大学

he University of the South Pacific

スターリング・コナイナオさん
Starling Konainao

ソロモン諸島を旅立ち、日本へ向かうとき、私は東京で何が起こるか全く予想することが出来ませんでした。成田空港に到着するや否や、都市、人々、ラッシュアワー、交通機関が私の目に飛び込んできました。しかし、毎日、朝と午後に自分が地下鉄を利用することが自分にとって徐々に当たり前となっていました。宿泊施設やおもてなしのおかげですぐに日本の生活にも慣れることが出来ました。

上智大学は教室、カフェテリア、娯楽室、公園などすべてが近くに位置しており、快適な学習環境を提供している大学でした。私が受講した授業は「現代の日本文化と社会」、日本の教育として「日本語」でした。とても有益なプログラムばかりで、自身の西洋世界に対する考え方が全く新しい次元まで広がりました。グループ活動での交流やフィールドトリップを通して、私たちはより刺激的で、そして本格的な学習をすることができました。

文化の授業では、水と環境管理の重要性を学びました。これは現在深刻な環境問題に直面している母国のソロモン諸島にとっても非常に重要なトピックであり、興味深く学ぶことができました。また、日本での生活を通して、日本人の心理、特に日本人の「尊敬」の文化はとて特別で、私たちの社会とは異なるものであることを実感しました。最後に、教育學に関心があった私にとって「日本の教育」から学んだことはとても多くありました。様々な教育制度を比較し、それをソロモン諸島の状況と比較するといった論議では、母国の抱える教育問題に対して積極的に取り組みたいと改めて決心するきっかけとなりました。

しかし、学びとは答えよりも疑問をもたらす



最終報告会で母国の儀式的紹介をするスターリングさん（左端）



トリニダード・トバゴ
より

西インド諸島大学セント・オーガスティン校

The University of the West Indies (St. Augustine Campus)

エイダン・ロバーツさん
Aidan Roberts

日本に到着した時、私は夢を見ているかのようでした。大学で2年半日本語を勉強しましたが、実際に日本に来て、日本文化を体験することが私の目標でした。千葉から東京までのバスの中で、日本語でガイドさんと話しながら、窓の外を眺めた瞬間、このためにこそ、私が今まで一生懸命頑張ってきたのだ、と実感し、そして日本は想像していた以上に美しかったです。

東京での生活は、トリニダード・トバゴでの生活ととても異なっていた驚くことばかりでした。トリニダード・トバゴでの生活は比較的ゆっくりでリラックスしていますが、東京は常に活気があり、日本人は決して仕事の手を緩めることはないのだらうと感じました。この点に関しては、日本とトリニダード・トバゴの人々はお互いに学べることがあると思います。

都内散策で、東京スカイツリーから浅草寺、高徳院までの全ての観光地をまわることができました。日本の伝統的な芸術を見たり、現代の日本と共存する宗教的な土地を観光したりすることは本当に素晴らしいことです。上智大学の講義の一つである「日本の教育」のコースがとても楽しかったです。日本の教育制度にはたくさん優れている点があると考えると同時に、教師や生



週末のイベントに参加した日本人学生とエイダンさん（左）



◆鎌倉視察
19日には鎌倉へと向かいました。このころにはすでに招待学生と日本人学生の親交は深まっていて、学生同士の間には活発な交流が見られました。当日は高徳院、長谷寺、鶴岡八幡宮、建長寺と回り、学生たちは鎌倉の雰囲気を楽しむことなく堪能することができました。特に、寺と神社の違いや歴史的建造物に使われている建築技法についての話には、多くの留

ての情報他の学生に知ってもらうだけでなく、他の国の情報を得たうえで自分ができることは何かを考える良い機会になったことでしょう。

◆フェアウェルパーティー(最終報告会)
1月31日には、招待学生の一か月にわたる日本での学びの成果発表のため、上智大学のフェアカルティ・クラブにてフェアウェルパーティーが執り行われました。招待学生たちは自国の衣装を準備しており、会場を華やかに彩りました。当日は、学校法人上智学院佐久間勤理理事長及び上智大学 嘩道佳明学長を始め、招待学生の出身国からの大使や関係者に出席いただきました。最初に嘩道学長から学生一人ずつにプログラムの修了証が手渡されました。その後のパーティーでは、学生たちは4つのグループに分かれ、それぞれの1か月の成果を報告しました。日本で学んだこと、経験したこと、感じたことを堂々と話す学生たちからは、充実したプログラムを修了したことへの達成感と自信を感じることができました。各グループの発表の最後には、学生が自らの今後の目標を語る場面があり、それぞれ日本での1か月の滞在を通して得た経験や自信をもとに、さらなる飛躍を誓っていました。(文責…金原)

滞在中のスケジュール

1/7 (火)	来日
1/8 (水)	上智大学でオリエンテーション／都内バスツアー
1/9 (木) 1/11 (金)	授業
1/12 (土)	東京観光
1/13 (日) 1/14 (月)	休日
1/15 (火) 1/18 (金)	授業 日本人学生との交流会
1/19 (土)	鎌倉視察
1/20 (日)	休日
1/21 (月) 1/24 (木)	授業
1/25 (金) 1/27 (日)	休日
1/28 (月) 1/30 (水)	授業
1/31 (木)	授業 APIC 主催フェアウェル・パーティー
2/1 (木)	離日



左上：成果を発表中の学生たち 右上：修了証を手渡しする嘩道学長（右）
下：参加学生一同



セミナー中の様子

2018年12月12日、上智大学地球環境学研究所主催、上智大学、APIC、コロンビアにあるハベリアナ大学 (Javeriana University) 共催で、上智大学大学院地球環境学研究所後援によるシンポジウム「Island Sustainability Symposium」が上智大学にて開催されました。

本シンポジウムは、「災害耐性およびリスク管理」と「生物文化的多様性の利用と保全、陸地生態系ベースの管理」の二つの柱を基礎に多様な視点を共有することを目的としています。本シンポジウムの開会にあたって、上智大学からは大塚寿郎副学長、APICからは佐藤昭治常務理事、ハベリアナ大学からは Dr. Luis Miguel Renjifo 副学長から挨拶があり、続いて同年10月に設立された Sophia University Island Sustainability Unit (SISU) のリーダーでもある上智大学大学院地球環境学研究所のあん・まくだなるど教授から同ユニット設立の趣旨について説明がありました。

ルで構成されており、パネル1では上智大学大学院地球環境学研究所の黄光偉教授がモデレーターを務め、同研究所の鈴木政史教授、ハベリアナ大学 Lilia Roa Fuentes 教授、榎木雅仁氏（農水省OB）をパネラーに迎え、さくらサイエンスプロジェクトの現場である宮城県大崎市の蕪栗沼・周辺湿地での調査報告を行い、島の持続性に関する4Rについて議論しました。

パネル2では上智大学大学院地球環境学研究所の織朱實教授がモデレーターを務め、ハベリアナ大学 Juan Ricard Gomez 教授、坂口法明 JICA 国際協力専門員、奥田直久環境省大臣官房サイバーセキュリティ・情報化審議官をパネラーに迎え、大島（東京都）での調査について話し、島の生物文化的多様性の保全と利用について議論しました。

パネル3ではあん・まくだなるど教授がモデレーターを務め、ハベリアナ大学 Pablo Ramos Baron 教授、海女の早瀬千春氏、Jackie Steele 東京大学研究員を迎え、持続的な資源管理のため不可欠なものとしてのジェンダーと生物文化的多様性について議論しました。

パネル4では上智大学及びハベリアナ大学の大学院生らが登壇し、島の持続性について議論を交わし、会場の参加者らと活発に質疑応答を行いました。

最後に、ハベリアナ大学の Maria Adelaide Farah Quijano 学部長と上智大学の黄光偉教授が閉会挨拶を務めシンポジウムは終了しました。



第6期ザビエル留学生 決定

2019年のザビエル留学生として、パラオ出身のウバイ・キングジオ (Ubai Kingzio) さんが決定しました。ウバイさんは本年9月に上智大学国際教養学部に入學し、4年間の留学生生活を送る予定です。

「ザビエル高校留学生奨学金」は、2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APICの三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学へと留学生を派遣するプログラムです。これまで計7名の学生が本奨学金制度で上智大学に入學し、2018年9月には第1期生が卒業しました。

ザビエル高校

Xavier High School, Micronesia

1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立された。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集う。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元ミクロネシア連邦大統領やクリスチャン前大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出している。

▶ ウバイさんによる所信表明 (APIC 和訳)

自分がこれから4年間、東京で勉強することになると知ったときは、少し圧倒されそうになりましたが、このことについてよく考え、日本がどんなに素晴らしい場所か想像したら、9月から日本での生活を始めることがとても楽しみになりました。上智大学のキャンパスを見ることや、日本文化を体験すること、日本での生活に慣れることがとても楽しみです。

ここミクロネシアでは、バスケットボールはとても人気のあるスポーツです。私は、学校や島で開催されたバスケットボールのイベントにはほとんど参加しています。身体的に健康であることはザビエル高校の放課後の活動において必須です。上智大学で行われているスポーツや課外活動に期待しています。

私は日本の新生活に慣れることが楽しみです。日本は私にとってこれから4年の間、新しい故郷となりますので、わくわくしながら準備を始めています。日本食が大好きですし、ミクロネシアに入ってきている日本料理よりも深みのある日本料理を体験するのが待ち

きれません。また、大学での授業が始まり、上智大学の厳しい勉強についていけるのかも知りたいです。

上智大学の学友や教授、管理者たちと知り合いになり、彼らとコミュニティを築いていきたいです。コミュニティの中で生活することは、これまで私が経験してきたイエズス会の教育における主要部分だからです。日本や世界中の国から来た人たちと友達になり、専門的なつながりを築くのは特に有益なことだと思います。太平洋にある非常に小さくユニークな国の出身である私は、島での暮らしの様子を他の人たちに紹介することが楽しみです。

APIC と上智大学が提供してくださったこの機会にとっても感謝しています。これからの4年間、イエズス会の教育は、ミクロネシアのザビエル高校と同じように、私の人生を変え続けていくでしょう。上智大学や東京、日本の全てが私に提供してくれるものを活かせることを心待ちにしています。この機会を与えてくださったことに重ねて御礼申し上げます。



ウバイ・キングジオさん
Ubai Kingzio

APICでのインターンを決めたのは、今まで授業やボランティアサークルでの活動を通して学んできた国際協力について、より実践的に学んでみたいという思いがあったからでした。実際に、リーダー招待計画やザビエル留学生事業に関する業務、毎週のミーティングを通して、国際協力には自分が思っていた以上に様々な関わり方があることを実感させられました。現地に行って活動する人だけではなく、地道に縁の下で力持ちのような存在として国内でプロジェクトを支える存在があることを意識することができるようになりました。

また、自分の中で最も大きな収穫は、働くという点に関して今までよりもはつきりとイメージがついたことです。最初は初めての経験ばかりで緊張していましたが、慣れていくにつれて、ある意味では働くということは学生として今やっていることとの延長なのだと思うようになりました。もちろん責任の大きさは学生とは異なるかもしれませんが、一つの目的を達成するために、相手が何を必要としていて、今自分がすべきことは何なのかを考え、目の前の一つひとつのことを誠実にこなしていくことが、働くことなのだと思います。それは、APICの方々の一つひとつの言葉や姿勢から学ばせていただいたことです。「お願いされたことに対して、それ以上のことをやる。」仕事に対する意識についてお話ししていただいた時のこの言葉が強く印象に残っています。将来働く時に限らず、学生の今から、相手のことを思いやり、常に相手の立場に立って考える姿勢を大切にしていこうと思いました。

様々な業務を通して、自分の知識不足や至らなさに恥ずかしさを覚えることもありましたが、この悔しさを糧に、社会に出る前の大学以外での学びもより充実させ、知識や教養をもっと身に付けていきたいです。貴重な時間を割いて学びの多いインターンの機会をくださったAPICのみなさんには本当に感謝の気持ちでいっぱい입니다。



インターンプログラムを終えて

上智大学 外国語学部2年
稲村 ほのか さん



上智大学より短期インターン生の受け入れ実施

2018 年度秋学期 上智大学「グローバル・インターンシップ科目」

APICと上智大学の間の教育連携に係る包括的な協定(Memorandum of Understanding)に基づき、上智大学「グローバル・インターンシップ科目」の就業体験として、2019年2月1日から28日にかけて、2名のインターン生がAPICでの実習を行いました。

上智大学におけるインターンシップ科目は、夏期及び春期の授業休業期間中に約一か月の就業体験を行い、併せて事前・事後講義への出席や課題提出を行うことで単位が付与される、上智大学の正式な授業科目のひとつです。

APICは、40近くある本インターンシップ科目の就業実習受け入れ先のひとつとして、2016年2月より毎回数名の学生を受け入れてきました。APICでのインターンシップでは、電話・来客対応や文書作成などの一般的な業務はもちろんのこと、外務省幹部などを講師に招いて行う講演会の運営や外国からの要人招待の際のアテンド補助など、様々な業務を体験します。

今回参加した2名の学生はインターン期間中、APIC本多義人評議

員へのインタビュー記事の作成を業務の一環として担当しました。インタビュー相手の経歴を自分で調べ、情報収集しながら質問事項を考えることから、インタビューのポイントを整理し、実際にインタビューを行って記事を作成するまでの一連の作業を行いました。インタビュー内容は本会報誌に掲載されています(27ページ参照)。



ザビエル留学生たちとの交流



インターンプログラムを終えて

上智大学 総合人間科学部教育学科2年
中田 都希 さん

「働く」ということは、何かのプロフェッショナルになることなんだ。これが約一か月のインターンを終えて得た、一番の学びです。私は小学生のころから国際協力に携わりたいたいと思っており、自分は支援国に入り、自ら汗を流す仕事をするんだと漠然と思っていたいました。今回インターンに参加したのは、自ら支援国に赴くわけではない、しかし必要とされている、日本国内での事務方の仕事があるようなものを知りたかったからです。APICでの仕事を通して、事務方が土台を作ってくれて、プロジェクトを動かすことができ、各地での活動を行うことができました。そして肌で感じることもありました。そして考えたことが、冒頭に挙げた「働く」II「何かのプロフェッショナルになる」ということです。国際協力の仕事は、必ずしも専門家じゃないとできないわけではなく、むしろタスクを担うことを通して、そのタスクのプロへとなっていく過程も「仕事」は内包して



インタビュー中の様子

私は元々中学の時から英語は好きだったのでこれは上智に入った甲斐があったと嬉しかったですね。しかも夏休みの練習後のある日、ユニホーム姿で部屋にかえる途中野球好きの神父に声をかけられその神父がなんと当時の上智大学学長の大泉神父だったんですね。それがきっかけで大泉元学長に親しくご交誼を賜り色々と薫陶を受けたわけですが、第一他の大学では学長とお付き合い出来

るなんて考えられませんよね。他学校に行った高校の同窓生に話したらみんな嘘だと言っていましたよ。このことがきっかけで上智が大好きになり、また在学中も卒業後も上智に関する事を色々任される様になったのだと思いますが、もし野球部に入ってなければつまらない学生時代を送っていたか、ほかの大学に移っていたでしょう。

当時の上智は学生数より神父の数の方が多いぐらいのこじんまりした家族的な大学で、私が二年生の時から入学要綱から男子のみの言葉が削除され消極的男女共学大学になりました。敗戦後世界のカトリックの人たちが「日本は何もないでしょう、何が欲しいですか」と上智大学に聞いた時、ビッテル神父は「何もいりません、ただ教育の人材を沢山送ってください。」と云ったそうで、博士号をいくつも持った外国人の神父たちが実に多くいましたね。これが当時から上智は国際的と言われた所以ですね。当時は大学に来ると暗くなっても帰りたくなるほどで、本当に良き時代でしたね。

学部は経済学部でしたが経済学をあまり真剣に勉強した記憶はありませんが月曜日は朝から夕方まで英語の授業だけで実に楽しかった覚えがあります。ただ毎回宿題が出るのは敵いませんでした。外国人の神父が教えていましたから日本語を全く使いませんでした。遅刻に関しては厳格で時間になると教室に鍵を掛けられてしまふんです。遅延証明書があっても入れてすらもらえませんでした。上智で教わったことは博愛と奉仕の精神ですかね。“Men and Women for Others, with Others”他

略歴

1961 年	三喜興産株式会社(石油製品販売業) 入社
1963 年	東神タンカー株式会社(同上系列内航油槽船主) 移籍
1966 年	同社退社、海運仲立業本多商会 設立開業
1990 年	三喜興産(株) 代表取締役副社長 就任
1994 年	本多商会廃業
同年	東神インターナショナル株式会社 設立 代表取締役社長 就任
2001 年	米国ロスアンゼルス市港湾局 日本代表
2003 年	日本海運仲立業組合(日本シッピングプロカーズ協会) 理事長就任
2005 年	同上 代表取締役会長 就任
2014 年	同上 名誉会長 就任
2015 年	(一財) 国際協力推進協会 評議員 就任

上智大学関連

1971 年～ 2008 年	上智大学同窓会(ソフィア会) 常任理事
2000 年～ 2006 年	ソフィア会 副会長
2006 年～ 2009 年	ソフィア会 会長 学校法人 上智学院 評議員

本会報誌では APIC の活動を支える理事・評議員へのインタビューを行っております。今回の「APIC 役員に聞く」では本多義人評議員(東神インターナショナル株式会社名誉会長)へのインタビューを行い、ご自身の学生時代から社会人時代以降のご経験や、それに基づく国際協力への見解、そして若い世代へのメッセージについてお聞きしました。

【聞き手: APIC インターン生 稲村、中田(上智大学)】

Interview

東神インターナショナル株式会社名誉会長

本多 義人

APIC 評議員

昔の上智大学

Q1・学生時代は上智大学の経済学部経済学科で学ばれたと伺いました。当時は男子学生の数も生徒数に対する教員の数も多く、現在の上智大学とは異なる雰囲気があったとお聞きしております。大学での印象に残る出来事や思い出はありますか。

いっぱいありますよ。実は上智は志望校ではなく、国立を失敗した後高校の先生と相談して願書が間に合う唯一の大学だったんで慌てて飛び込んだんです。私の高校は文武両道で私は野球をしていて、選抜で甲子園に行きましたので、早速野球部に入ろうと思いました。ですが当時の上智の野球部は東都リーグ3部の下位で練習を土手の上から見たらユニホーム姿もだらしない無帽の者もいていっぺんに入る気をなくしました。でもマネージャーは私が野球をしていたのを聞きつけ熱心に勧誘にきたので、それでは野球部を強くしようなんて生意気な意気込みで結局は入部したんですよ。ところが入って見ると何と監督がアメリカ人の神父で練習も試合も指示はみんな英語なんです。

者の為に、他者と共に」というスローガンがありますよね。他の大学ではこうはいきませんが上智大学は4年間通うだけで皆何か持って出ていきます。それは神父達の力かもしれませんが、それだけ学校の中に何かがあるのだと思います。阪神淡路大震災の次の日に卒業生を集めボランティアに飛んで行ったり、知的発達障害の人々の為のオリンピック協会^{※注1}を立ち上げたりと上智の卒業生には本当に頭の下がる人がいっぱいいます。無論ソフィア会にも東日本災害のために活動している団体もあります。

会社設立への想い

Q2・貨物船および旅客船による海上輸送や運送代理、石油やガスの販売を行う東神インターナショナル(株)という会社を創設され、現在は名誉会長をされているということですが、どのようなきっかけや目的で東神インターナショナルを創設されたのですか。

大学卒業後、石油販売と輸送をしている小さな会社に入りました。その一年後国内の輸送だけでなくタンカーをたくさん持っている外国の船会社と日本の石油会社をつなぐシブブローカーを始めないかという打診が私にありました。とにかくその時代その会社に英語のできる人なんていませんでしたから、これは絶対に自分がやろうと引き受けました。そして提携先確保の為ニューヨーク

に行かなければならなかったのですが、当時は渡航先に身元保証引受人がいないとビザが下りなかったんです。それで困っている、前に話した野球部の監督だった神父からアメリカでの学生のサマーセッションの引率を手伝ってくれないかと依頼が来たんです。昭和39年、東京オリンピックの年でしたが夏休みに米国で学びたいという学生が40数人になり、その引率者としてアメリカに出国出来ますから、渡りに船で引き受けました。学生がロサンゼルスで勉強している間、ニューヨークに行き無事提携交渉を済ませ、その後ロンドンにも提携先を見つけて、それから毎年ニューヨーク、ロンドン、ノルウェー、スウェーデンなどに度々商談や仕事で行くことになりました。仕事では日本人と西洋人との間に立つて交渉するわけですが、そこで私がいつも感じたことは日本人は勝手だなということでした。商売は売り手と買い手がいてそもそも五分五分で始まり状況次第でそれが四分六分になったり三分七分になるのですが、当時の日本人は自分が有利と分かると相手の立場も考えず極端な要求を強めます。間に立つて恥ずかしい思いを何度もしましたね。ロンドンで、近付くタクシーの目の前を渡ろうとした人に急停車した運転手が怒るところか降りてきてその人の手を引いて反対側に渡らせてあげたのを目撃した時、日本人も早くこうならなければと思いました。

そういう意味で若かったこともあって、日本の得意先の理不尽な人とはよく喧嘩しましたね。この仕事には上智で学んだ他国の文化や歴史の相互

理解の大切さが実に役に立ちました。数年後、一緒に仕事をしていた部下たちを連れて自分の会社を始めました。当時は随契と言って信用されるとすべての仕事を任せられる時代で多くの石油会社、船会社、商社とネットワークをつくりました。今すべて後輩に任せ私はできるだけ邪魔しないように心掛けています。日本人も余裕ができ、また外国取引も多くなったからか、相手のことを思いやる人増えてきたように思います。

相互理解とAPICと上智の連携の意義

Q3・日本人は相手の立場を考えることが苦手であるとのことですが、上智大学はグローバル化率引型大学採択校として人材育成や国際交流の促進に力を入れ、APICでは国際理解の促進や国際開発協力に関する支援事業を展開しています。本多評議員は、同じ目標掲げる両者が連携することの意義についてどのようにお考えですか。また、両者の今後の連携がどのような形で深められていく事に期待をしておられますか。

APICが推進している国際協力は、結局は相互理解の上に立つて相手の立場も考えての事業です。上智大学ではいま東南アジア、ヨーロッパ、アメリカだけでなくアフリカや南米など世界中から学生を集めキャンパスの中のグローバル化を進めています。これは言葉だけでなくいろいろ国との相互理解を深めることに依ってグローバル人

若者へのアドバイス

Q4・今までのお話から、本多評議員は「相手の立場に立つ」ということを学生時代から常に大事になさってきたように思いますが、その他、いまの若者や学生に向けての期待やアドバイスがあればお願いします。

私が一番言いたいことは「失敗を恐れるな」ということです。私たちの時代と違って今はインターネットの制度があるように、机の上だけの学びじゃない実体験での学びが提供されています。しかし今の若い人はみな自分が傷つくのが嫌で何事をするにも及び腰で、もしダメだった時に自分が傷つかないようにアプローチしてきます。せっかく経験を積む機会があっても気概がないんです。これは会社においても社会においてもよくないことです。何か勢いを感じると相手も協力してやろうという気持ちになるものです。何か聞くときでも「間違っているかもしれないが」とか「こんなことを聞くと怒られるかもしれないが」なんて枕詞をつける人が多いですね。今の若者には「七転び八起」がないのか優等生であればあるほど転ぶのを嫌がるけど、転ぶことから学ぶことはたくさんあるから若いうちは大いに転んだ方がよい。さらに個人的になりますが、「中国の古典」から学ぶことは多いですね。儒教思想ですが五常とか四端の意義を知っているだけでも少しは自分磨きの役に立ちます。勉強や知識もさることながら人

Q5・その規範が今の本多評議員の中にも上智に関わる原動力となつて生き続けているのですね。

THE・ソフィアン

間の内面を磨くことの大切さをぜひ若い人たちに考えてほしいと思います。それと中国の古典でなくともよいから日本の文学や歴史書、なんでもよいから学校の本以外の本をたくさん読んでください。

母校愛つてこともないけど、丸々ソフィアンですよ。上智は学生、父母、教職員、卒業生、すべてをソフィアファミリーと呼びます。私がいた頃と今の上智は隔世の感がありますが、その座標軸すなわち教育理念は創学以来、戦時中を含め今も一貫して変わらないのはさすがです。卒業後仕事に打ち込みながらも野球部の監督を5年間したり、経済学部や大学の同窓会の役員を引き受けたりして、今尚実に多くの卒業生たちとの交流を楽しんでいます。

※注1 1968年、故ケネディ大統領の妹ユニス・シュライバーは、当時スポーツを楽しむ機会が少なかった知的障害のある人たちにスポーツを通じ社会参加を支援する「スペシャルオリンピックス」を設立。上智大学の卒業生である細川護熙元総理大臣の夫人、細川佳代子さん（1966年・上智大学英文学科卒）により1994年、「スペシャルオリンピックス日本」が熊本に発足した。



APIC が奨学金制度を実施しているミクロネシア連邦ザピエル高校へ訪問した際の様子

材を育成するためと思います。一方APICは太平洋、カリブ島嶼国からの留学生だけでなくそれらの国々の様々な分野^{※注2}への支援を行う大きな意義ある事業を展開しております。この両者の関係が深まることは両者の発展に大変意義あることであり、学生だけでなく、上智の教授陣も巻き込んで今後もますます密接な関係になると良いと思っています。

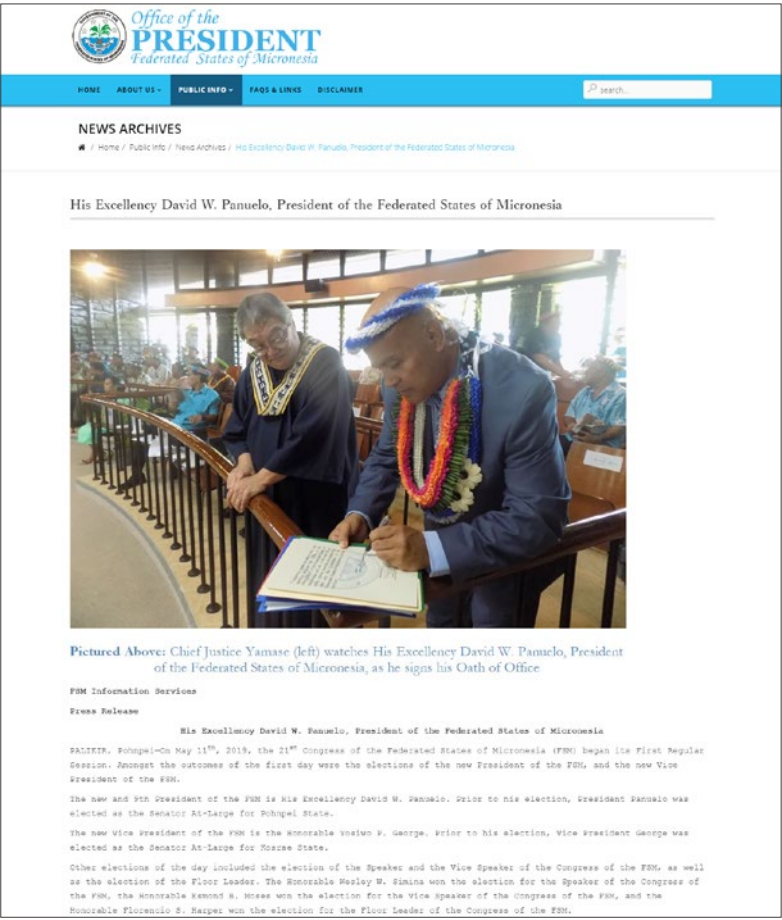
※注2 日本の学生をミクロネシアに短期で派遣する「ミクロネシア・エクスポートジャーツアー」や、環境や観光業など各分野で活躍する人材を育成するための日本へのリーダー招待事業、留学生に向けた日本文化体験プロジェクトなど、様々な形で国際理解を促す活動が行われている。



左から：インターン生の金原さん、稲村さん、本多評議員、中田さん、APIC 芳賀理事

2016 年「太平洋諸国若手リーダー招聘計画」参加者

デイビッド・パヌエロ氏がミクロネシア連邦大統領に就任



2019 年 5 月 11 日、ミクロネシア連邦において、ボンペイ州出身のデイビッド・W・パヌエロ（David W. Panuelo）議員が新大統領に選出されました。（左：パヌエロ氏が大統領に選出されたことを知らせる記事。ミクロネシア連邦パブリック・インフォメーション・オフィス（FSMPIO）より引用）

パヌエロ氏は、2016 年 2 月に APIC が実施した「太平洋島嶼国若手リーダー招聘計画」の参加者です。同計画でパヌエロ氏は、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島の 3 か国からの若手リーダーと共に、我が国のオピニオン・リーダーとの会談を行い、環境、エネルギー、観光に関する視察を行いました。このプログラムについては、APIC ウェブサイトでも紹介しています。（<http://www.apic.or.jp/events/027.html>）

2016 年 2 月に実施した APIC「太平洋諸国若手リーダー招聘計画」に参加していた際のパヌエロ氏



左上：APIC 佐藤理事長主催夕食会にて
左下：秋葉剛男 総合外交政策局長（当時）によるブリーフィング



右上：日本・太平洋島嶼国友好議員連盟との懇談会
右下：大島理森 衆議院議長と握手するパヌエロ氏



JICA 青年海外協力隊（ボリビア派遣）
大垣 直哉 さん

ボリビアの首都ラパスにて

留学中、島嶼国ならではの深刻なゴミ問題を目の当たりました。ポイ捨てが日常化しており、道端にゴミがあるのは当たり前。行政によるゴミ収集サービスが地方では不十分なため、各家庭で集めたゴミは自分達で燃やすか、裏山、海に廃棄され、環境汚染が深刻化していました。島嶼国の地理的状況や政府の行政能力の欠如から、環境問題の発生は仕方がないと諦めている住民もいました。私は、もったいないという気持ちと同時に悔しさを感じました。

帰国後に、「大好きなミクロネシアの環境問題に対して行動を起こしたい。」という理

由から、国際協力推進協会（以降、APIC）のインターンシップに挑戦。インターン業務では、国際的な舞台で活躍できた、佐藤理事長、佐藤常務理事、荒木理事・事務局長を初め、多くの職員、インターンの先輩にお世話になり、「当たり前」のことを当たり前に行なうことが出来た。小さな物事でも動かすことは不可能である」という教訓を得ました。

特に想い出深い経験は、APIC と麗澤大学が共催した「ミクロネシア短期大学・学生招待計画」で 2 名のミクロネシア学生を麗澤大学に招待し、インターン生としてアテンド業務を担当したこと。その他にも大洋州・カリブ地域から招聘した要人アテンドや広報誌の編集業務、イベント広報、英語を実務的に使用する多くの機会などをいただき、多くの素晴らしい経験をさせて頂きました。加えて、国際的に活躍されてきた方々の実務的な考え方をオフィスで吸収でき、普段は決していることのできない世界を見せていただき、世の中に無知な自分にとっては、本当に刺激的な時間を過ごすことができました。素晴らしいプログラムを通じて、少しでも若い世代間の肌の交流、次世代リーダー育成に貢献できたことは自分の誇りになっています。

APIC のプログラムで麗澤大学に留学していたミクロネシア短期大学（College of Micronesia-FSM）の学生達と大垣さん（左端）



APIC ではグローバル人材育成の一環として長期インターン生を受け入れています。今回は、長期インターン生として APIC の事業に携わってきた大垣直哉さんに、印象に残っているプロジェクトや、大学卒業後の進路について聞きました。

国際協力との出会いと
青年海外協力隊への参加

私は現在、青年海外協力隊としてボリビアに派遣され、環境教育活動を行っています。私は大学時代、「ダボス会議で聞く世界の英語」という本で紹介されていた緒方貞子さんのスピーチに衝撃を受け、その憧れから、国際協力の分野で活躍するという将来の目標をもちました。以降、日々の語学力の向上に加え、国際関係論や人間の安全保障、開発のツールなどを勉強し始めました。しかし、本を読んだり、講義を聞いたりする中で、その中でも世界の開発問題は深刻化し、何もできていない自分に嫌気が差していた中、留学セ

ンターの掲示板に掲載されていた「ミクロネシア大学交換留学」の案内が目にとまり、未知の島国にあるミクロネシア短期大学に留学することになりました。

同時に、学内のミクロネシアをフィールドとした環境教育チーム、「ジャパネシア」の活動にも参加していました。恩師の成瀬猛麗澤大学教授（元 JICA 職員）が「いくら英語ができて、知識があつたとしても、人間力がなければ人は付いてこない」との助言に刺激を受けて、チームリーダーとして活動に参加することに。ジャパネシアの活動では、

チームがまとまらず、頭を抱えて毎日悩むこともありましたが、まずは一人の人間個人として関わることを心掛け、心から尽くし、尽くされた時に初めて目の前の人間が仲間になることを学びました。チームが一体感を持ち、ミクロネシア大學生と協働で環境問題の解決に取り組むのはとても刺激的でした。

前述の経験を経て、まずは開発途上国の現状を知り、実務を通じて強靱な人間力を鍛えたいと思い、青年海外協力隊（環境教育）に応募し今に至ります。これから 2 年間一生懸命取り組み、協力隊として現地の同僚と共に考えて展開する草の根レベルでの現場経験を通じて得られる新しい視点があることを信じています。無知な自分に対して、真摯に接して下さった多くの方々の背中を追いつつに活かし、将来国際協力の現場で活躍できる人材になれるよう、自分を鍛えたいと思います。

APIC 役員名簿

※ 2019 年 6 月 30 日現在

◆ 役員

理 事 長	佐藤 嘉恭	(最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使)
常務理事	佐藤 昭治	(最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使 (兼パラオ・マーシャル諸島))
理 事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会 事務局長 (最終官職：財務省 国際局局付派遣職員 (アジア開発銀行))
理 事	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長 (最終官職：通商産業省 通商産業審議官)
理 事	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官)
理 事	芳賀 達也	一般社団法人太平洋協会 事務局長
理 事	舟木 いさ子	ヤクモ株式会社 取締役
理 事	村上 洋	味の素株式会社 社外監査役
理 事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監 事	金成 憲道	ドイツ証券株式会社 上級顧問
監 事	兵藤 廣治	兵藤税理士事務所 税理士 (最終官職：衆議院 大蔵委員会調査室長)

◆ 評議員

評 議 員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評 議 員	洪澤 健	コモンズ投信株式会社 取締役会長
評 議 員	島内 憲	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評 議 員	廣野 良吉	成蹊大学 名誉教授
評 議 員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長

ザビエル
留学生
奨学
金

◆ ご寄附のお願い ◆

「ザビエル高校留学生奨学金制度」は、上智大学の留学生基金の他、皆様の APIC へのご寄附により、2019 年 7 月現在、総額約 8,856 万円をお預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。誠にありがとうございます。

皆様に御礼申し上げますとともに、本留学生奨学金制度への更なるご支援をお願いいたします。

対 象 ザビエル高校卒業生 毎年1～2 名
留学先 上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金 卒業までの4年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆様からのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先
三菱 UFJ 銀行 本店(店番 001) 普通口座 1660339
口座名：一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口
カナ名：ザイ) コクサイ キョウリヨク スイシン キョウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

事務所移転のお知らせ

この度、一般財団法人国際協力推進協会は、事業拡大および人員の増加に伴い、2019 年秋頃より事務所を移転することとなりました。
これを機にさらに事業の充実を図り、一層の努力を重ねてまいる所存です。
今後ともご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新住所 〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 6-12
紀尾井町福田家ビル(上智大学四谷キャンパス 13 号館) 3 階

※移転時期や住所、電話番号等の詳細につきましては後日再度お知らせいたします。

令和元度事業計画(簡略版)

2019 年 6 月 20 日に開催された理事会において、令和元年度(2019 年 7 月 1 日から 2020 年 6 月 30 日まで)の【事業計画】及び【収支予算】が、以下のとおり承認されました。(詳しくは、APIC ホームページをご覧ください。)

◆ 太平洋島嶼国開発協力事業

太平洋島嶼国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「太平洋島嶼国開発協力基金」を活用して、太平洋島嶼国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、外務省アジア大洋州局大洋州課と協議も行い、次のプロジェクトを実施する。

- ① 太平洋諸国・大学生招待計画
- ② 太平洋諸国・記者招待計画
- ③ 太平洋諸国・リーダー招待計画
- ④ 太平洋青年研修
- ⑤ 太平洋諸国・環境セミナー
- ⑥ 上智大学ミクロネシア・エクスポージャーツアー支援事業
- ⑦ ミクロネシア短期大学・学生招待計画(麗澤大学・上智大学)
- ⑧ APIC とミクロネシア自然保護基金(MCT)との協力事業(大学院生支援)
- ⑨ APIC とミクロネシア自然保護基金(MCT)との協力事業(プラスチック・リサイクル・プロジェクト)
- ⑩ APIC とミクロネシア自然保護基金(MCT)との協力事業(Chuuk Conservation Society(チューク保全協会)支援)
- ⑪ 上智大学地球環境学研究科との環境に関するシンポジウム開催
- ⑫ ナンマル遺跡保存支援事業
- ⑬ ミクロネシア写真展

◆ 日・カリブ友好協力事業

カリブ諸国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「日・カリブ友好協力基金」を活用して、カリブ諸国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、外務省中南米局カリブ室、カリブ共同体(カリコム)事務局等とも協議の上、次のプロジェクトを実施する。

- ① 西インド諸島大学・大学生招待計画(太平洋と同時実施)
- ② カリブ諸国・記者招待計画(太平洋と同時実施)
- ③ カリブ諸国・リーダー招待計画
- ④ 西インド諸島大学・副総長・学長招待計画
- ⑤ 上智大学地球環境学研究科との環境に関するシンポジウム開催
- ⑥ 上智大学と西インド諸島大学の連携支援

◆ 国際協力に関する講演会事業

外務省幹部、在外大使による時局の日本の外交課題や激動する国際情勢などについて質の高い内容の話題を提供する講演会として、毎月一回(8 月を除く)実施する。また、同様の外交課題・国際情勢等をテーマに小規模の懇話会(東京及び地方)を実施する。

- ① APIC 早朝国際情勢講演会
- ② 国際協力懇話会

令和元度収支予算(簡略版)

(単位:円)					
収入の部			支出の部		
	平成30年度予算	令和元年度予算		平成30年度予算	令和元年度予算
1. 収入	72,353,000	76,553,000	1. 事業活動支出	106,661,900	127,852,765
a. 基本財産運用収入	3,000	3,000	a. 太平洋島嶼国開発協力事業	37,100,000	54,200,000
b. 特定資産運用収入	48,000,000	48,000,000	b. 日・カリブ友好協力事業	35,700,000	25,900,000
(太平洋基金・カリブ基金)			c. 早朝講演会事業	6,100,000	9,300,000
c. 維持会員会費	19,000,000	19,000,000	d. 留学生奨学金事業	4,800,000	3,900,000
d. 受取寄付金	1,800,000	1,500,000	e. 事業間接費	22,961,900	34,552,765
e. 雑収入	3,550,000	8,050,000	2. 管理費支出	21,504,100	26,165,335
			a. 役員報酬・給与手当	7,860,000	9,960,000
			b. その他の管理費	13,644,100	16,205,335
当期収入合計	72,353,000	76,553,000	当期支出合計	128,166,000	154,018,100
前期繰越額	463,700,000	438,800,000	次期繰越額	407,887,000	361,334,900
合計	536,053,000	515,353,000	合計	536,053,000	515,353,000



APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部、大使による **APIC 早朝国際情勢講演会** を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場 所 ホテルオークラ東京 会議場

時 間 午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ

TEL : 03-5577-2900

FAX : 03-5577-2901

E-mail : apicinfo@apic.or.jp

■発行人

佐藤 嘉恭（理事長）

■発行日

令和元年 7 月 1 日

■発行所

一般財団法人 国際協力推進協会

〒101-0054

東京都千代田区神田錦町 3-15-6

名鉄不動産竹橋ビル 7 階

TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901

MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集

編集長

副編集長

編集

APIC インターン生

芳賀 達也（理事）

加藤 奈美

斉藤 拓馬

喜多 萌子

金原 弘恭

稲村 ほか（上智大学）

内海 風花（国際基督教大学）

間 美倫（東洋大学）

木村 規頼（上智大学）

中田 都希（上智大学）